



2020年 12月 人権一口講座



「コロナ禍のなかで」

早いもので今年も残すところあと1カ月となりました。この一年を振り返ってみると、新型コロナウイルス感染症に振り回されっぱなしであったように思われます。2月末に突然実施された学校の一斉休校に始まり、4月上旬には緊急事態宣言が発出され、外出や営業活動等の自粛要請が行われ、これまでの日常生活が大きく変わりました。多くの活動が制限され、経済をはじめ多分野に大きな影響を及ぼし、今もなおその影響は続いています。

このような突然見舞われた社会の変化により、今年は女性と子どもの自死が増加しているとのこと。8月では前年比で女性が4割増、子どもが倍増しているとの報告がなされています。新型コロナウイルス感染症の発現により、解雇や学校の休校等で社会との接点が薄くなり、経済的な問題や生活問題、DV等の家庭問題が深刻化したとも考えられています。重ねて、7月以降に相次いだ芸能人の自死報道も大きく影響している可能性も示唆されています。

また、難病患者の医師による安楽死事件も社会に大きな衝撃を与えました。生きる権利があるのだから死ぬ権利も当然あるという意見があれば、様々な意見が出ており、議論が交わされています。私の友人にこの事件と同じ難病に罹患した人がいました。会うたびに病気の進行が見て取れる状態の中、その友人はとても前向きに病気と向き合っていました。病気の進行に伴い自分でできることが徐々に減っていく中、それでも残存機能をフルに使って、趣味の書や絵を描き、夢を語っていました。病気との向き合い方も人それぞれですが、周囲の人間の関わり方も大きく影響するのではないかと感じます。

日本は、先進国の中で、15歳から39歳の若年層の死因が自死である割合が1位となっており、深刻な問題となっています。ですが、この事実を知っている人はあまりいないように感じられます。もともと、日本において「死」は忌み嫌い、避けられる傾向にあります。ですが、「死」について考えずして、「いのち」の大切さなどを理解することも難しいのではないのでしょうか。

コロナ禍によるステイホームで、家族と共有する時間がこれまでより長くなった今、「いのち」について家族で考えるいい機会ではないかと思えます。今だからこそ、普段あまり話をしないことについて、家族等と話してみたいかがでしょうか。これまで気付かなかった新たな発見があるかもしれません。

(熊本市ふれあい文化センター広報紙「かけはし」十二月号より)

短いメッセージ 発表の時 みんながうなずいてくれた...
勇気が出た うなずくって すてきな魔法

熊本市・熊本市教育委員会・熊本市人権啓発市民協議会のカレンダー 春竹小学校四年 河合 美空さんの作品より